

問題1

<出題の意図>

問題1は、大都会と田舎の間を往復しながら生活している内山節による『「里」という発想』新潮選書(2005年)から抜粋し出題したものである。筆者は、経済のグローバル化は、社会の近代化と経済発展に大きく貢献しているものの、人々が暮らしている風土が生み出したローカルな経済倫理とは調和していないことを指摘し、この不調和が豊かさを実感できない理由であると論じている。そして、筆者は、田舎暮らしの中で、ローカルな「里」の自然、歴史、風土に多元的・多層的な世界観を見いだし、そこにこそ、人が確かな幸福を感じることできる「真実」が隠されていると述べている。さらに、ローカリズムは、社会の一元化を象徴とするグローバリズムとは必ずしも矛盾するものではなく、この両者を調整することで、これからの国家や世界の新しいあり方を模索すべきであると提言している。

高校生にも馴染みのあるファーストフードに代表されるように、経済のグローバル化は大きく進展している。しかし、その半面、長い歴史の中で築き上げてきた和食のようなローカリズムの解体が進んでいる現状に対する問題意識を問うものである。

(設問1)

設問1では、本文中に示された「ローカル」について筆者の考えを要約する文書把握を求めている。この設問は、これまでの本学における出題傾向に沿ったものであり、長文の中から重要箇所を抜き出す情報収集能力と、その材料をもとに字数内で再構成する文章力を問うたものである。

問題文の全体を見渡すと以下のようなポイントが挙げられ、これをもとにして200字に再構成できれば解答となる。

- ・グローバルとローカルの対比
- ・グローバル化した経済とローカルなままでいる人間の感覚のズレ
- ・そこに生じる豊かさへの不享受
- ・グローバル化した社会とこれまでの多元的なローカルな社会とのズレ
- ・ローカルの特徴 多元的・多層的・小さい世界 各地域の風土が育んだもの
- ・人はこれまでひとつのシステムだけではなく、多様な取り決めのあるローカルな社会の中で調和して暮らしてきた。
- ・人はローカルの中にこそ豊かさを見出す。

<解答例>

今や世界の経済は、共通の市場が形成され、主導権をとった国の経済システムが世界標準になって、グローバル化している。ところが、人々の経済に対する考え方は、自分が暮らしてきた風土の中で育まれたローカルな感覚のままであるため、経済と人間との間に不調和が生じている。人は、これまで多元的かつ多層的な小さな世界の中で調和して暮らしてきたので、グローバル化した世界ではなくローカルの中にこそ豊かさを見出す。(196字)

(設問 2)

設問 2 では、これまで「グローバル化」されてきた世界の潮流の中で、「ローカル」な世界に価値を置いている筆者の考えに対する意見を求めるものである。これは、「ローカル」について筆者の考えを要約した設問 1 の解答を考慮に入れながら、具体的な例を挙げて論証することを期待した。採点にあたっては、グローバル化を肯定的にとらえて論述しても、筆者の考え方に沿ったものであっても、それ自体を採点基準には入れず(どちらであってもかまわない)、自分の意見と論旨の一貫性があるものを高く評価した。

グローバル化が進む現代社会において、かえって「ローカル」なものに注目が集まったり、再発見されている。ご当地グルメ、各地域の名産を活かしたキャラクター商品、地域の名前をブランド化したハンバーガー、田舎に泊まったり、県民性のおもしろさを紹介するバラエティー番組、地域情報を満載した雑誌やテレビ番組、方言を活かした漫才などは、受験生にとっても馴染みのある「ローカル」な具体的な例と言えよう。

筆者の考えに対して、このような具体例を交えて、個性豊かに意見が述べられたものを高く評価とするものとした。

< 答案の傾向 >

(設問 1)

問題文は、約 4600 字と比較的長文であったが、わかりやすい内容であろうと判断し採用した。ところが、問題文全体を見渡し、「ローカル」とその対極にある「グローバル」を対比させながら、筆者の述べる「ローカル」の特徴をうまく抜き出して、文章に構成し直すという能力を問うたものの、満足できる解答は約 2 割に過ぎなかった。この原因は、問題文を読む速度が遅く全体を俯瞰できないこと、文中から重要なキーワードを選ぶことができないこと、自分にとって身近な例に目が行き過ぎてしまうことなどが挙げられよう。このため、問題文中にある例を入れることで冗長になってしまうものや、抜き出したキーワードが少ないためにそれを補おうとして無駄な言葉が多すぎる解答が多く見られた。

(設問 2)

これまで「グローバル化」されてきた世界の潮流の中で、「ローカル」な世界に価値を置いている筆者の考えについての意見を求めた。約 8 割がローカルな世界を肯定的にとらえて論述しており、残りの約 2 割はグローバル化の推進を支持していた。どちらの立場にたっても、それ自体を採点には反映させることはしなかった。

筆者の考えをふまえながらも各人の自由な意見を期待したにもかかわらず、問題文中の例をなぞらえて論述するものがほとんどを占めた。この解答パターンの場合には、自分の意見を述べるというよりは、問題文の例に部分的に同意して、とにかく字数を稼ごうとする受験者の意図が垣間見え、低い評価をせざるをえなかった。また、自分の意見を補強する材料として具体例を挙げて論証している例の中にも、偏った思想に基づいたものや、文意とは関連の薄いものも散見され、これらについても低い評価となった。

書き出しの部分と最後の部分で論旨が一致しないもの、また事前に用意された文章なのかもしれないが、文意・文脈とは関係なく使用されている解答も散見された。

若者らしい個性豊かな発想がうかがえる解答を期待したものの、実際にはわずかであり、結果的には、そつなくまとめている解答を高く評価せざるをえなかった。こうなると、漢字の能力、作文の基本的なルールを守っているなど、文章を書く基本能力の差が採点の評価を左右することになる。特に、ごく基本的な漢字におけるミスの多さは目に余るものがあり（例えば、重要→重用）、それが採点者の心象にも大きく影響した。

問題 2

<出題の意図>

- モノの豊かさを追い求めることで豊かさを実感できた時代が終わり、「豊かさとは何か」が本気で問い直される時代に入ったのはおおよそ 1980 年代。民間でも、政府でも、「真の豊かさ指標」が構想される時代に入ってけっこうな時間が経っている。「真の豊かさ」を支える大事なものが他人とのつながりが実感できているかどうかというところにありそうだ、と指摘する政府白書も登場した。そのような今、高等学校生徒が備えているべき知見を確かめたいと考えた。与えられた情報を消化し、整理し、問立てに対応して適切な解答案を模索する力をいかに発揮できるか、を問おうとするものである。
- 個々の図表の精確な読み取りを求め、全図表から総合的に読み取れるものを適切に記述することができるかどうかを問う。加えて、読み取れた内容について見解を持てるかどうかを見ることによって、社会経済問題にアンテナをどの程度張ることができているかを評価する。

<出題の工夫>

- 従来問い方に工夫を加えた諸点あり

〔図表資料の読解 ひとつひとつ答えてもらう〕

複数の図表を示すやりかたは踏襲しているが、「全体としてなにが言えるか」といった問い方では一部の図表に注目しただけの解答や特殊な点に注目しすぎた解答を排除できなかったと反省。資料読解力をできるだけ精確に評価するために、図表個々に問いを立てた。ただし、図表それぞれから読み取れることは複数あるので、「最も注目」すべきことを絞り込ませる作業を課している。（設問 1）

〔全体としてなにが言えるか 解答記述をしっかり反省してもらう〕

設問 1 への解答内容を綴り合せれば「全体としてなにが言えるか」に解答することになる。設問 2 の半分に自動的に答えられることになるわけであるが、各図の内容のつなぎ方（AND なのか BUT なのか、OR なのか）で「全体としてなにが言えるか」という課題に正面から向き合えたかが分かってしまうことになる。ここで解答案を自己点検できるかどうか、表現力と読解力とが同時に問われる場面である。また、設問 1 での「最も注目」すべきことへの絞込みが適切であったかどうか、この場面で気になってくるはずである。設問 1 に戻ってみる手間を厭わないかどうか、厭うて「全体として言える」はずのことから遠ざかってしまうかどうか、解答が二極分化するであろうことを想定した。

〔回答者の意見を求める すなおに回答者の知力を表現してもらう〕

資料全体から読み取れることをとりまとめさせるだけでなく、解答者の意見を求めている。解答者の社会関心がどれぐらいか、を見ようとしている。受験時点で社会問題や経済問題へのアンテナがあ

る程度構築されているはずだが、アンテナの動き具合をみたり、知識量を測ろうとしたものではない。資料全体から見えた事柄について、自分の知見と同じなのかどうか、すなおに見つめてもらい、同じなら同じでふだんから考えていることを綴ってもらえばよいし、異なるなら異なるところを指摘しつつ考えていることを示してもらえばよい。

〔問題の主文で誘導 設問それぞれで答えるべき内容を間違わないように〕

以上のことを正確に受験生に理解してもらい、正答に向かって進みやすいように問い方を工夫した。すなわち、問題2の主文で、設問が2つあり、それぞれの設問でどのような取り組みを求めているかを開示している。注意を払って落ち着いて問題主文と設問文を読み合わせれば、迷いは少なくなり、誤答の確率は下げられると考えた。

<解答の傾向>

上述のように問い方を工夫したが、いずれの工夫も期待した効果を上げえなかった。要点ごとに解答傾向を整理して、以下に記す。

〔ひとつひとつ答えることによって資料をきちんと読む〕

- ・図表の「読み取り」においては、複数の系列が示されている場合には、数値の水準や変化に注目した観察が行われるだろう。しかしながら、得られた複数の情報を書き出し、並べてみて、最も注目すべきものを絞り込むという基本動作ができていると思える解答が少数にとどまったことは残念である。
- ・作者者としては、読み取れる内容を「最も重要」なものに絞り込み、なおかつ簡潔に表現することを求めている。しかしながら、絞り込みが真剣に行なわれたと思える答案は極めて少ない。読み取れる事柄を羅列する解答が多く、簡潔に表現する努力が見うけられないものが多かった。
- ・図表が示している事柄を客観的に読むことを求めているにも関わらず、「読み取り」という設問文を誤解して回答者自身の知見を絡ませた勝手な憶測を披瀝する解答さえ少数ながら見られた。
- ・第5図の読み取りには苦労したようだ。しかしながら、解説図をまずもって読んでもらい、第1図から第4図に読み進めてもらった上での第5図であるから、第5図で読み取るべき主題はおのずと浮かび上がって見えてきてしまうはずである。決して少なくない解答において、見切ることのできているものがあつた。それらはいずれも、設問で要請している簡潔な記述を果たしている。

〔「とりまとめ」で、設問1への解答記述が適切であったかどうか振り返る〕

- ・設問2に答えようとする場面でこのことが強いられていることに気づき、振り返ることができていると見える解答はほとんど無かつた。設問1の解答欄に記した内容を並べるだけの解答が多数であつた。6資料全部からなにが見えたのかを総括するためには、立ち止まって思料するための時間が必要で、少なくとも設問1の参考解答と5つの解答のつなぎ方(ANDなのかBUTなのか、ORなのか)を検討しなければならなかつたはずである。
- ・また、設問1への解答記述を連ねる(書き写す)だけで「とりまとめ」ができたことにしたために、自分の意見を述べるための余地をつくることができている答案が極めて多かつた。

〔資料全体から見えた事柄について、自分の知見と同じなのかどうかを問う〕

- ・羅列型の「とりまとめ」が多く、しかも資料から読み取れる事柄のつながりを考えてみることでできているために、資料全体から見えてきた事柄を意識することができず、したがって自分の

知見と対照させてみる場面が創れなかったように思える。

- ・資料が指し示す事象を前にして、自分の知見をすなおに比較対照させてみるのがそもそもできていない。

[書き下ろしてみた文章を冷静に読み直して加除訂正や構成を組み直す]

- ・図表の凡例名称をそのまま文章に用いて、数量の水準や変化を記述する解答例が半数はあった。凡例名称をそのまま用いてしまうと、図表から読み取れる正確な内容からかけ離れた記述をしてしまうことになる。このことに気がつけない解答が多数見受けられた。そのほか、採点作業をつうじて気になった諸点を付記しておこう。

[小論文対策に行き過ぎがないか]

- ・解答者の見解を問うと問題文にあれば、提示資料から覗える問題点について解決策を考案して論じなければならないのだと思い込んでしまう傾向が強くなるように思えてならない。この度の作問のように、解答者の知見をすなおに表現して欲しいという狙いを持っている場合でも、解答者は無理やり解決策に言及しようとしたために規範的な抽象論を論じることに終始してしまったり、知識にあるものを引っ張り込んでしまうために一知半解な記述にとどまってしまう。主張が根拠をもっていることや正当な理由を備えていることを表現できた解答は、解決策提示型においては皆無であった。
- ・紋切り型の解答構成が目立った。とくに設問2のとりまとめ部において、「以上からいえることは斯く斯くしかじか」とか「要するに斯く斯くしかじか、詳述すると以下」といった構成が採られている解答が多数見受けられた。「とりまとめ」を要求されている場合に対応法としては、一般的な作法であろう。しかしながら、受験者は、このことを形式的にしか理解できていないように思える。この解答構成を採ったものでは、1例を例外として、すべての解答が「斯く斯くしかじか」を詳述部の単純な繰り返しとしてしか表現できていない。たっぷり書けるわけではなくて制限された文字数で解答しなければならないという執筆条件がきちんと認識できていないともいえる。

[知識の正確さがつつい気になるという学習態度が培われているか]

- ・文章の読み解きでも図表の読み解きでも、「読む」作業を押し進めていけば、自分自身が持ちえている知識や知見を突き合わせざるをえない。この度の作問では、社会や経済に関する知識や知見がおのずと問われる。しかしながら、たとえばわが国の「高度経済成長」を説明材料に採用した解答で、正確に高度経済成長期を示すことができているものは皆無であった。「高度経済成長」という言葉は知識になってはいるものの、どのような経済事象を特定してその言葉が用いられているのかの理解が極めて不十分なのであろう。したがって、その時期がいつであったかについての知識があやふやで、間違った時期を指して高度経済成長期だと記述し、結果として図表の誤読や誤解釈に陥っている。